

「他者」としての女性とその可能性

——社会批判としてのフェミニズムへ向けて——

宇田川 妙子*

Woman as the Other and its Possibility:

Toward Feminism as Critical Studies of the Modernity

Taeko UDAGAWA *

はじめに

近年、フェミニズムの影響は、社会運動、学問領域、日常生活等のあらゆる分野で極めて多大なものとなってきている。またフェミニストたちの活動内容や主義主張も多様化し、今やその動きを概括することすら容易ではない。しかしながら、その一方で、こうした傾向がフェミニズムの本質的な問題提起を曖昧にしてしまうことを指摘する懸念の声がフェミニストの中からも出始めている。

本稿も、同様の反省に立ち、今後のフェミニズムを生産的な展開へと導くために、その背後にある本質的な問題を改めて浮き彫りにしようとする試みの一つである。現在、女性に関する研究や運動は百花繚乱の呈さえあるが、それゆえにこそ、その基本的な問題意識を再認識する作業は決して無駄ではないだろう。何故我々は女性の問題を論じなければならなかったのかという問いに戻ることは、これまでの業績に対する建設的な批判のための土壌を用意するだけでなく、さらにはフェミニズムを女性問題という枠を越えた運動へと超越させる有効なきっかけとなるからである。筆者は、女性問題とは女性のみに関する問題ではなく、女性という概念を方法論的に用いた社会批判であると考え。この可能性をどこまで伸ばすことができるかに、フェミニズム全体の真価がかかっているのである。

さて、こうした問題意識に基づく本稿では、女性という概念そのものが実は歴史文化的な所産であるという問題を取り上げていきたい。ここにこそ、女性問題とはむしろ社会の問題であることが如実に示されているからである。また、とするならば、女性の問題は各文化によって異なった形を取る可能性もあるのだが、この問題については最後にもう一度触れることとする。

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

I. フェミニズムの「攻撃性」

筆者がフェミニズムに意識的な関心を持つようになって以来、しばしば気になったのが「フェミニストは攻撃的すぎる」という言説である。

フェミニズムという言葉をも初めて記述したのは、19世紀初頭の空想的社会主義者フーリエであると言われている¹⁾。この時期、西欧では政治的にも経済的にも大変動が起こりつつあり、女性という概念に対する異議申し立ても一層表面化するようになっていた。しかしながら、社会における性差の存在に気付き、それを疑問視し、個人的な問題あるいは一般的な問題として異を唱えようとする者をフェミニストと定義するならば（本稿では以降、この定義に従う）、それ以前にも非常に多くのフェミニストたちが存在した。ところが、こうしたフェミニストたちの行動・発言は、それがフェミニズムという言葉が生まれる以前のものであれ、しばしば否定的な評価を受けてきたのである。それが特に女性のフェミニストである場合、事実上、社会からの抹殺であったことも少なくなかった。

例えば、女性の果たした役割も決して少なくないと言われているフランス革命の直後、実は女性の権利拡大に関する要求も女性自身によって盛んに表明されていたのだが、そのほとんどは実を結ばなかった。「人権宣言」に対する「女権宣言」を出したオランプ・ド・グージュは、「家事を放り出して、共和国の国事に口を出し、法の復讐の刃の元に」²⁾ギロチンにかけられ、後にボードレールによって「殺戮を愛する女」と歌われ美しく伝説化されたテロワニュー・ド・メリクールは、何度か人々の組織化を計った末、敵対する過激共和主義派の女たちに捕らえられ、尻を叩かれて女子救済院に拘禁された。そして彼女を排除した女たちも、次第に「自堕落女」「乱酔女」「女ゆえの悪癖のすべてを備えた雌の化物」とそしられ³⁾、その発言は嘲笑をもって迎えられようになり、1795年にはあらゆる政治集会に女が参加することが禁じられた。

もっとも、この時期活躍した女性たちは下層階級の出身者が多く、彼女たちの理論も組織能力も未熟かつ早急に過ぎて、いたずらに過激な行動に出過ぎたのではないかという見方もできない。しかし、同じフランスで17世紀に「プレシェーズ」と呼ばれた文才ある上流婦人たちが盛んに揶揄されたことは、これを題材にしたモリエールの『滑稽な才媛たち』や『女学者たち』が喝采を受けたことからうかがえる。19世紀には、サンドに代表されるような乗馬服に長靴という出立ちで活歩した女性たちは「雌ライオン」と呼ばれた。イギリスでも18世紀末、男女共学による女子教育の構想をもち込んだ『女性の権利の擁護』を著したメアリ・ウルストンクラフトは、同時代の女性からも「激情の哀れな犠牲者」⁴⁾と言われるほどの過激さゆえに近年まで余りに過小評価され続けていた。そして、ナイチンゲールが看護婦としての仕事に歩み出す以前の自伝的な小説『カサンドラ』は、ヴィクトリア朝時代の女性に対する因習と圧迫についての告発でもあるが、あまりに常軌を逸しているとの理由で大幅な修正を経て出版しなけりなかつたという⁵⁾。さらにこの時期は、拒食症、ヒステリー、神経衰弱が「女性の病」として衆目を集めるようになったが、その病因として彼女たちがおかれていた社会的な状況が考慮されることはな

く、性的なフラストレーション等の身体的な理由で片付けられ、ハンガーストライキを行った婦人参政権運動家に対して拒食症と診断した医師が強制的に食物を与えることも行われていた。⁶⁾

これらは一例に過ぎない。これまで何と多くの女性たちが、自らの社会的な役割に疑念を抱き、抵抗しようとし、さらには積極的にそうした考えを公に表明しようとするとき、滑稽だと嘲笑・侮蔑され、過激だと非難され、気狂いや病人、色情狂扱いされてきたことか、そして、それ以上にいかに多くの女性たちが、こうした批判を避けるために自ら進んで口をつぐんできたことか——現在ようやくその歴史が明らかになり始めている。

ところで、こうした女性たちの挫折の歴史を考えると、その責めの大半は、勿論彼女たちをそこまで追い込んだ社会にあるとは言えるものの、やはり彼女たちの「攻撃的な」やり方にも問題があったと言われることがある。彼女たちは、余りに長い間社会から排除されてきたがゆえに、適切な社会的言動の仕方がまだ分かっていなかったのだと。確かにそうした側面もあったであろう。1894年、女性小説家ジョージ・エジャトン「将来もっと幅のある、もっと自由な生活が営めるようになれば、われわれ女性は今よりもバランスのとれた人間になるだろう」⁷⁾と書いているという。そうなれば、女性もより「理性的な」方法で自らの問題に対処することができるだろうし、そうした「理性」こそがフェミニストに求められているのかもしれない。しかし、問題はそれほど単純であろうか。

実際、現在でも女性フェミニストに対する無理解は決して少なくない。彼女たちの言動は、依然として笑いものであり、常軌を逸しやすいと見做されている。確かに今では、こうした批判が露骨に表明されることは少ないが、それは、ある意味でより巧妙な形に変化しながら確実に存続している。

例えば、ジェンダーと科学をテーマにした研究を行っている科学者ケラーは、かつての指導教授から、女性についてどんなことが分かったかと尋ねられた経験があるという。⁸⁾これに対して彼女は「女というより男について、それより科学について多くのことが分かってきた」と返答したが、彼女も指摘しているように、この教授の問いには、フェミニズムを女性についての研究に限定する意識が潜んでいる。即ち、これまで女性に関する研究は未開拓だったので、その補充するのがフェミニズムの仕事であろうという見方であり、さらにここには、フェミニズムをそうした補完的な作業に囲い込もうとする思惑さえうかがえるのである。このように現在フェミニズムは確かに或る位置が認められつつあるが、その一方で実は囲い込まれ、他から切り離されてしまっている。これはフェミニズムのゲッター化とも言える現象であり、これでは、フェミニストたちを異端者扱いにしていた時代と本質的には何の変化もない。

事実、多くのフェミニストたちを苛立たせ、時には戦略的な意味合いをかねて過激な言動を選ばせた原因の一つは、こうした社会の側の変化の無さであった。ボーヴォワールは1949年の『第二の性』の中で既に「この主題（女）は、特に女にとっては、いらだたしいものである。新しい問題ではない。女性論は今まで相当たくさん書かれ、現在ではもうこの論争はほとんど火が消えている」⁹⁾と書いている。また、これまでの様々なフェミニズムの潮流を、とりあえず、女性の

特殊性を払拭することによって男女平等を目指す動きと、女性の固有性を強調することによって女性の地位を確保しようとする動きの二つに大別することもできるが、そのいずれも女性についての女性による議論であって、それらがともに社会全体の根本的な変革を目指しているとは考えられてこなかった。両者は時に激しく議論を戦わせ、フェミニストにとっては極めて深刻な矛盾をはらむ問題とされてきたというのに、彼女たちを取り囲む社会の側の対処は、せいぜい、こうした女性たちの動きを受容するか否かであり、自身は言わば安全圏に留まっていた。

しかし、フェミニズムの本質的な問題提起とは、たとえ現象的にはどう見えようが、単に抑圧されていた女性を解放することではなかったはずである。女性問題とは女性だけの問題ではなく、抑圧された女性を作り上げている社会の問題であるということが、その主義主張を問わずフェミニスト共通の認識であった。ところが、こうした意図は、先述のようにフェミニズムが一見市民権を得たかに見える現在でも十分に理解されてはいない。このことに気付いたフェミニストたちは、近年少しずつ戦略を変え始めている。それは、既に述べたことから伺えるように、これまで無視され抑圧されてきた女性たちの言動を表面化させるばかりでなく、その作業を通じて女性という概念そのものが実は歴史文化的な産物であることを明らかにしつつ、そのように女性を作り上げてきた社会の認識体系こそを浮かび上がらせようとするものである。後に詳述するように、特に近代西欧において女性とは「他者」として構築された概念であり、それゆえ、女性は彼等の認識体系の陰画として読むこともできるからである。そして、このように相対化された認識体系に対して、今後は逆に女性のもつ「他者」性を戦略的に照射することによって、その閉塞性を打破し、新たな枠組への変革を示唆することもできるだろう。

即ち、これまで社会は女性を作り上げてきたばかりでなく、女性を必要としていた。たとえその存在すらしばしば無視されていたとはいえ、社会はそのような女性に対する無視とともに構築されてきた。それゆえ1970年代半ばにアメリカのフェミニストたちを中心に流行した「個人的なものこそ政治的である」というアフォリズムに示されているように、社会の分析と変革に対しては、むしろ個人的なもの、女性的なもの等の概念が有効な道具となるという認識が、現在のフェミニズムの潮流の中に確実に生まれつつあるのである。筆者は、この点にこそフェミニズムの「攻撃性」の本質的な可能性があると考える。

勿論、かつてのフェミニストたちも攻撃的であったが、その中には「平静に書くべきところを、怒りに駆られて書いてしま」¹⁰⁾い、その「攻撃性」の本質を単なる被害者意識にしてしまった者もいた。それは時代的な制約を考慮に入れたとしても、フェミニスト側にも責任の一端があり、そのことによってフェミニズムに対する誤解が増幅されてしまったことを筆者は否定しない。しかしながら、その場合にも、女性たちの言動に対する非難が、先述の「自堕落女」などに代表されるように、往々にしてその私生活に対する非難に還元されていることを見逃してはならない。このように女性の問題がすべて常に私的・個人的な問題として処理されてきたということは、社会の側も彼女たちの「攻撃性」の本質を十分に理解していなかったことを示唆しているからである。そして、さらに言えば、フェミニズムの「攻撃性」とは社会＝男性のみに対するものでもな

い。いかに現社会の認識体系が男性を中心として構築されたものであり、その変革に対してはそこから排除された女性という概念がいかに有効であろうとも、その有効性とはきっかりに過ぎず、その変革の過程では女性そのものも変化せざるを得ない。即ち、フェミニズムは、従来の女性という概念をも越えようとするものであることを付け加えておく。

Ⅱ. 「他者」としての女性

では、以上のようにフェミニズムの本質的な「攻撃性」が女性という概念を方法論的に駆使することによって生ずるならば、次にこの女性という概念について具体的に論じていかなければならない。但し、その際、本章ではとりあえず、現在でもフェミニズムの議論が最も活発に行われている西欧の女性概念に焦点を絞って論じていく。

1. 社会の「他者」

「人は女に生まれえない。女になるのだ」というボーヴォワールの言葉に代表されるとおり、女性が歴史文化的な所産であるという指摘は既に何度もなされている。勿論、言われるまでもなく男性も作られたものである。しかしながら、女性が社会全体に対してもつ意義は、男性のそれと質的に大きく異なっている。

一言で言うならば、女性とは、ボーヴォワールをはじめ他の多くの思想家も述べているように、あらゆる意味で社会にとっての「他者」である。そしてこのことは、社会が「他者」性を女性に投影させることによって成立していることを意味している。つまり、社会の成立と女性という概念の成立とは言わば表裏一体の出来事なのである。これに対して男性という概念はむしろ社会の「他者」ではない。むしろ社会の正式な成員であることが男性の第一条件である。ゆえに正確に言うならば、女性という概念に対照されるべきは、男性ではなく社会である。確かに女性を「他者」として排除した社会は、実質上男性だけで成り立っており、この意味で女性と男性とは対立概念であるように見えるが、女性を女性として構築しているものは、男性ではなく社会という概念である。そしてむしろ男性概念の方が、こうして作られた女性の概念によって、その一部分に対応するものとして逆規定された下位概念であろう。これについては後に明らかにしたいが、少なくとも現在の女性と男性の概念は対等な位置関係にはないということは強調しておきたい。

さて、では女性が社会にとっての「他者」の概念化の一形態であるということは、具体的にはどういうことだろうか。再びボーヴォワールの『第二の性』から引用してみたい（尚、彼女は、男という言葉概念のそれではなく実際上の意味で用いているので、その場合、筆者の言う社会と同義であることを付け加えておく）。

女は男性のナルシスが姿を写す鏡である。彼は善意や悪意をもって女の上ののぞきこむ。しかし、いずれの場合にも彼が女に求めることは、彼がおのれの外にあって自己のうちにとらえ

ることのできぬすべてのものになれということだ。…女は、男が肉体的に所有できる他人の姿をかりた自己神化であるから、男にとってこの上ない報酬である。彼にとって「世界」の要約である。自己の価値や法則をおしつけた存在を胸に抱きしめるとき、彼が抱擁しているのは……すなわち自分自身なのだ。こうして、自分のものにしたこの他者と合一することによって彼は自分自身に到達したいと願う。宝物、獲物、賭や危険、ミューズ、案内人、審判者、仲介人、鏡など、女はそのなかで主体が制限をうけずに自己超越を行うところの、主体に対抗するが否認はしない「他者」である。……従って……もし女というものが存在しなかったら男たちはこれを発案しただろう。¹¹⁾

これまで女性について成された議論は男性のそれに比べて圧倒的に多く、しかしだがらといって女性の性格や本質について何らかの解答が得られたわけでもなく、女性は常に矛盾に満ちた存在とされてきた。社会は女性を取るに足らぬもの、欠陥品、余計ものとして蔑んで無視するばかりでなく、時には害悪を与えるものとして恐怖し、また逆に非現実的なまでの善や神聖さの象徴として崇拜の対象としてきた。しかしながら、このように多様かつ相矛盾する女性のイメージの数々は、それらが社会にとっては十分に理解しがたいものであるという点において共通性を持つ。ボーヴォワールが「他者」という言葉で記述したのは、女性概念のこうした側面である。

しかも、こうした女性の「他者」性には、女性がただ社会にとって理解しがたい存在であるということだけでなく、社会こそが理解しがたいものを必要としているという問題が含まれている。もともと女性が社会にとっての異物であったのではなく、社会が異物を必要とする過程で、女性が「他者」化されたと考えられるのである。

この問題を考察するためには、そもそもここで述べている「他者」とは、「同一者」という概念と密接に関連していることに触れておく必要がある。「同一者」の概念とは、簡単に言うならば、自らを「われ（またはわれわれ）」という一つの統一体として認識することであるが、その際、一般に我々が「われわれ」として自己を規定するためには、「われわれ」以外の存在、即ち「かれら＝他者」を必要とする。つまり「他者」は、我々が主体的な「われわれ」となるための道具なのである。

それゆえ、この「他者」はただ「同一者」と異質であるばかりでなく、主体性を剥奪されたモノであることが期待される。それは「同一者」の要請によって認識されるものであって、その逆ではない。「他者」は「同一者」との関係がなければ存在しない。この意味で主体性は一方的に「同一者」のみに付与されており、その限りにおいて「同一者」と「他者」とは本質的に非対称な関係である。「他者」は「同一者」の主体構築の必要性に合わせて様々に変化するかもしれないが、それがいかなるものであっても「他者」である限り、「同一者」としての「われわれ」による支配を免れることはできないのである。

さて、女性と社会との関係は、まさにこうした「他者」とそれを必要とする「同一者」の関係であると考えられる。少なくともこの視座から女性概念を見直すならば、その本質的な特徴がよ

り明確に浮かび上がるに違いない。社会によって主体性を剥奪された「女は男との関係によって形を定められ……るのであって、女自身として考えられる」¹²⁾ことはなかったがゆえに、様々な相矛盾するイメージを与えられ、自身もそれを内面化し続けてきたと推察されるからである。

とするならば女性概念の考察には、まさに社会との関連を常に考慮に入れていく必要があるだろう。しかしながら、その前に、この「同一者」と「他者」の観念自体が実は歴史文化的な所産であることに触れておかなければならない。実際、近年の近代西欧思潮に対する批判的検討の中で、この「同一者」の観念こそが、近代西欧の認識体系の基盤を形成していたことが浮び上がってきた。¹³⁾ここでこれらの議論に深入りする余裕はないが、彼らの言うように「同一者」が近代西欧に特殊な観念だとするならば、本稿にとって問題となるのは、「他者」の観念もまた同様に考えなければならないという点である。即ち、このことは、女性の「他者」性自体、歴史的に付与された性格であり、したがって我々の議論にも、女性が「他者」と見做されるにいたる歴史的な経緯についての考察が必要であることを示唆しているのである。それゆえ以降では、西欧における女性概念の変遷にも着目しながら考察を続けていくことにする。

2. 「宿命の女」の変遷

まず最初に、西欧の数多い女性像の中でも「宿命の女 (ファム・ファタール)」と呼ばれる男性を滅ぼす女性というイメージを取り上げてみよう。これは特に19世紀後半の西欧で主に文学や絵画の題材として流布した女性像の一つである。「宿命の女」に関する研究の第一人者マリオ・プラッツによれば、¹⁴⁾確かに古来より男を虜にして滅亡させる傲慢で残酷な女性は何度となく出現しているとはいうものの、この時期、このイメージは一つの紋切り型となるほどの影響力をもつようになった。メリメの生み出したカルメンを始め、その後、ゴーシェやフローベール、そしてスウィンバーンやワイルドらによって受け継がれた「宿命の女」は、他の有名無名の作家や画家たちも巻き込んでいった。そして、具体的にはサロメ、クレオパトラ、ヘレネ、シバの女王、スフィンクス、メアリー・スチュアートなど、既に古典や歴史の中でも男性との係わりが取り沙汰されてきた女性たちが華々しく文学や絵画の舞台を飾り始めたのである。

ところで、このうち「宿命の女」の典型とも言えるサロメについてだが、彼女はもともと聖ヨハネを死に至らしめた女性ではない。

サロメに関する伝説は聖書に由来しているが、それによれば、聖ヨハネの首を所望したサロメは、彼に義理の弟との再婚を非難されたために彼を憎んでいた母の命令に従っただけであった。彼女は、後年特にワイルドの戯曲に結晶化されているようなヨハネに対するエロティックな感情は微塵ももっていなかった。実際、中世を通じて描かれたサロメ像は、このヨハネ斬首にまつわる一連の物語絵の中で重要な位置を与えられておらず、脇役的な一少女であった。¹⁵⁾また彼女の踊りの場面の図も、逆立ちなど、少くとも現在の基準からみれば妖艶とは言い難いアクロバティックなスタイルで表現されている。

ところが16世紀頃から次第に、ヨハネの首を持つサロメというモチーフがこの一連の物語絵

の中から独立し始めた。このモチーフは、ティツィアーノを始めとするヴェネチア派の画家たちによって広まったと言われるが、例えばティツィアーノは、盆にのせられたヨハネの首を見つめるサロメの眼差しにどこが悩ましい表現を与え、両者の間に男女の恋愛感情を暗示させている。¹⁶⁾ またサロメ自身も、単なる小娘ではなく成熟した女性として表現されるようになり、より興味深いことに、絵の隅にスフィンクス像が描かれているものさえ何点か見つかっている。¹⁷⁾ つまり、彼はこの絵を男を滅ぼす女性像として意味付けていたと考えられるのである。さらにこの時期は、サムソンの毛髪を切り力を奮ったデリラや、敵の武将の寝首をかいだユディットらの図像も同時に増え始めていたことも付け加えておこう。それらの中には、ユディットとサロメの両者のモチーフの要素を兼ね備えており、一概にどちらか判然としないものもあるという。¹⁸⁾ このことは、個々具体的な女性たちがその個性を失って、より抽象度の高い、男性を脅かす女性というカテゴリーにまとめられていく過程として見ることもできる。

こうして、ヨハネに恋して、それを拒絶されたがゆえに彼の首を望むサロメという解釈が、ハイネ、マラルメ、フローベール等の手を経て19世紀には見事に定着するようになった。しかも、この時期のサロメは、ワイルドの戯曲やモローの絵に典型的にみられるように、極めてエロティックで煽情的に描かれている。これは、彼女を拒絶した聖ヨハネを精神的な存在と見倣す一方で、それに対する肉体的・性的な存在としてサロメが解釈されていたと見倣すこともできる。その意味でモローの《出現》と題されているサロメ像は非常に面白い。彼は、それまで盆の上に置かれた形で描かれていたヨハネの首を宙に浮かせ、その目がサロメを威嚇して見降ろしているという図を作り上げた。一方、サロメは若干腰を引いた姿勢を取り、恐怖に慄いているように見える。後背に光を携えて勿論肉体を持たない首だけのヨハネと、きらびやかな宝石とわずかな薄物の衣裳で肉体を強調されたサロメとの間にうかがえる上下関係。それゆえこの図は、女性を性の具現と見倣し、女性と男性を肉体（性）と精神との対立で捉えているばかりでなく、さらには、確かに肉体（＝女）は精神（＝男）にとって大きな脅威となるだろうが、その背後には精神の絶対的な優位が存在していることを表してはいないだろうか。事実、ワイルドの『サロメ』では、ヨハネの首を得たサロメは最後に殺されてしまう。

ところで、以上のような変貌を逃げたサロメは「宿命の女」の典型と見倣されるようになるのだが、この変化は、実はサロメだけに起こったものではなかった。クレオパトラやヘレネ等、他の「宿命の女」たちについても同様の誇張や変貌がみられるし、さらに嘆きの聖母（ドロレス）やダ・ヴィンチのモナ・リザなど、元来そのイメージとは無縁であった女性像も同様な視点から再評価された。¹⁹⁾ とするならば、これまで素描してきたサロメ像の変遷の背景には、この時代に「宿命の女」一般がもっていた意味の本質が隠されていると考えることができる。それは、女性が個々の個性（即ち主体性）を失って、一律に性的な存在として精神を脅かすモノと見倣されていく過程であり、これは、まさに既に述べた「他者」としての女性の構築過程の一つであると言えないだろうか。実際、興味深いことに、彼女たちの多くは東洋などの異国の女性として設定されており、その「他者」性がより一層強調されている。彼女たちは、その出身から既に「われわ

れ」ヨーロッパにとっての「他者」として表象されているのである。勿論、当時はいわゆる異国趣味的な絵画・文学が流行しており、女性だけが非西欧に結び付けられていたわけではない。しかし、この趣味自体が、実は当時の社会がいかに「他者」概念を必要としていたかの反映であり、その過程で最も有効な「他者」として利用されたのが女性だったのではないかと考えられるのである。とするならば、このように女性を「他者」の典型と見做して形象化する系譜は、いつからどのように始まったのだろうか。

3. 女性排除の構図

確かに古来より女性は、常に多少ともなり「他者」的な性質をもっていた。女性は嫌悪の対象になるか、崇拝の対象になるかの二極を揺れ動いていたからである。例えば、西欧文化の底流を成すキリスト教にとって女性とは、原罪を導いたエヴァに代表されるように人間を堕落させるか、あるいは聖母マリアのように人間に慈悲を与えるものであった。(もっとも、後者の女性観はキリスト教正統派においては後年になって認可されたものであり、基本的にキリスト教はできる限り女性を排除することを教義の中心においている)²⁰⁾。

また女性は、活動の主体となることは少なかったが、しばしばその活動に啓示を与えるという役を割り当てられていた。例えば、ミューズを始めとする芸術や学問の守護神たちの殆どは女性であり、彼女たちは、ダンテを天国へと案内したベアトリーチェのように男たちの活動を保護し導いた。さらに、彼等の追求する対象そのものが女性として象徴されることも多かった。16世紀末に出版されたリーパの『イコノロギア』によれば、理性、真理、知識、技術、想像力、経済、芸術、歴史、医学、形而上学など、抽象的原理や徳を表す図像のほとんどは女性の形に象られていた。デイドロとダランベールの『百科全書』の扉絵にも、真理の女神を中心に様々な学問の女神が所狭しと描かれ、その下方にそれらの学問の担い手(=男性)が彼女たちを見上げている。²¹⁾ 即ち、女性は彼等にとって目指すべき目標の象徴として用いられていたのだが、この場合でも女性がモノとして扱われていることには変わりはない。

さて、このように西欧文化における女性という概念の「他者」性の系譜は極めて長い歴史をもっているが、筆者は、その系譜の中でも特に17世紀前後に一つの大きな転機があったと考える。なぜならば、確かにそれ以前にも女性をモノと見做す観念は存在していたが、この時期、この観念が女性概念のすべてを規定するほどに強まったと推察されるからである。事実、女性がモノであるという考え方は、西欧文化にのみ特徴的なものですらない。例えば、文化人類学者レヴィ＝ストロースが提唱した「女の交換」理論(女性は結婚という制度において集団間の交換財即ちモノと見做されるという理論)は、多くのフェミニストたちの反発にもかかわらず、ほぼ普遍的にどの社会文化においてもあてはまる。しかしながら、だからといってこの理論に問題がないわけではないのだが、その場合にも問題点とは、この理論そのものではなく、それがそれ以外にあるであろう女性のあり方や女性についての考え方を被い隠してしまった点にあることに気付く必要がある。事実、西欧文化では、この理論に代表されるように女性の存在をモノとしてのみ限定して

しまう傾向が強い。そして、この傾向が急激に加速される転機となったが、これから考察していかうとする17世紀であり、この時期、女性をあらゆる基準から排除しようとする構図が確立してしまうのである。

さて17世紀は、しばしば近代の黎明期であると言われる。確かに近代の定義いかんによって、その時代区分には様々な議論がある。しかし、少なくとも思想史的に17世紀を振り返るならば、この世紀はケプラー、ガリレオ、デカルト、ニュートンらによって自然科学という形の新たな認識枠が西欧に誕生した時代であった。

この新たな認識枠とは、一言で言うならば、人間の勝利、あるいは理性という概念の誕生である。それ以前の世界観においては、宇宙のすべての真理は神に委ねられ、人間はその神の摂理に受動的に従っていただけであった。極端に言えば、人間は真理には決して到達できないのであり、それに触れようと望むことすらタブー視され、実際、異端として弾劾された。ところが、この時期、コペルニクスの地動説に代表されるように、人間も宇宙の背後にある法則を掴むことが可能であるという考え方が表面化し始め、こうした人間の営みが理性という言葉で積極的に評価されるようになったのである。

ところで、この動きは同時に自然が人間から分離され支配されていく過程でもあった。²²⁾宇宙の秩序は理性によって解明できると主張する彼等の理論的根拠は、自然とは一種の「時計」²³⁾、即ち、それ自体では力を持たない粒子が因果関係で秩序付けられている機械であるという認識であった。実際、この認識に立ったデカルト等の当時の思想は機械論哲学と総称されている。こうして彼等は、自然からあらゆる意味での力を剥奪し、その解明と称して自然を支配していくようになったのだが、この時、自然がしばしば女性のイメージで語られていたことを見逃してはならない。

例えば、科学的探求の動機に初めて理論的な根拠を与えたとされる〈近代科学の父〉フランシス・ベーコンは、科学の目的を自然の支配と制御にあると論ずる際に、極めて性的な言説を駆使しているという。「自然の秘密をよりいっそう深く解明するためにも、……これらの秘密の穴ぐらにはいりこんだり、奥深くつきすすむことをためらってはならない」²⁴⁾という彼の主張は、まさに女性に対する凌辱のイメージとだぶる。また、彼の影響を受け、1662年のロンドン王立協会設立の立役者の一人でもあったグランヴィルも、科学の役割を「自然を虜にし、彼女を我々の目的にかなうよう従わせるための方法」²⁵⁾だと述べている。一方、このように女性に擬せられた自然を取り扱う科学者が男性的な職業と見做されるのは当然の帰結であろうが、実際、17世紀後半より西欧の各地で設立されたアカデミーでは女性は排除されていた。当時、例えばマーガレット・キャベンディッシュ²⁶⁾のように会員になるにふさわしい女性がいたにもかかわらず、アカデミーは「男たちの手による技を基にして築かれた才知」²⁷⁾の場として形成され、以降、女性は学問から遠去けられることになるのである。

同様の問題は、この世紀にクライマックスを迎えた魔女狩りをめぐる論争にも見て取れる。勿論魔女狩りという現象は様々な要因が複雑に絡みあって出現したものだが、何故、この時期に魔

女狩りが消滅したのかを考えると、それは、この時期に浸透し始めた機械論哲学の勝利によると言われている。事実、自然の能動的な力を否定していた機械論哲学の敵対者は、一般に考えられているような神学＝教会ではなく、自然の力を認めていた自然魔術であった。そして、人間の理性が自然から魔術も悪魔も追い払った結果、魔女狩りが終わったというのである。しかしながら、その過程においては、実は機械論哲学者自身が魔女の存在を認める書物を出版し、魔女狩り熱に加担した時期があった。²⁸⁾そして実際、この時、魔女狩りは歴史上最も熾烈を極めたのである。

機械論者が理性を主張しながら魔女の存在を認めた理由としては、まず、やはり悪魔の存在を必要としていた教会との政治的なバランスや、機械論が行き着くかもしれない無神論の回避などが意図されていたと考えられるかもしれない。しかし、自然魔術を否定しているはずの彼等が（勿論極めて控え目な形ではあったが）実証しようとした自然魔術の現象のほとんどが魔女という女性で表象されていたこと、そして、その魔女の力がその肉体や性に由来するものであると語られていたことに気付くならば、彼等にとって魔女の存在とは、彼等が自然を理性で支配しようとする際に有効な道具であったとも言えないだろうか。即ち、その背後には、理性に従属すべき自然を女性と見做し、それゆえ自然＝女性を支配する理性とは女性を排除した男性的な原理であるという論理が暗示されており、魔女狩りとは、こうした論理を徹底させるために間接的に利用されたとも考えられるのである。こうした視点からの魔女狩りの再考は、近年、イーズリー等によってようやく始められたばかりである。²⁹⁾

以上から、17世紀に確立した人間＝理性による自然の支配という構図の背後には、実は性差の問題が隠されていたことが浮かび上がってくるに違いない。確かに当時の表現に従えば、自然を支配したのはあくまで人間であって男性ではなく、そこに性的な意味合いが顕わになることはなかった。しかし、この人間からは既述のように巧みに女性が排除されており、この時期、人間という概念の勝利の陰で、そこから自然とともに女性の排除が決定付けられたのである。確かに当時、人間という概念の論理的な帰結の一つとして、女性も人間の範疇に入れようとする主張もあった。例えば、男女の差は生殖器という器官の差異だけで精神には性別はないと論じ、女性にも学問を奨励したプーラン・ド・ラ・バルは良く知られているが、こうした意見のほとんどは無視されていった。³⁰⁾

そして筆者は、このような人間からの女性の排除という考え方が、以降の西欧文化の女性に対する姿勢の基本的な特徴となっていると考える。この考え方は、単に男性優位の構造の中で女性を男性に従属するものと見做すというものではない。女性を人間というあらゆる正当な基準・範疇から一旦排除し、そのことに女性存在の本質をみようとするものである。即ち、女性という概念は、それ以降、まず第一に排除されるものとして形成されていくことになる。例えば、女性はいくつと基準（＝人間）に満たぬ未熟なもの、下等なもの、したがって基準に支配される従属物となるだろうし、また、基準から外れた不可能なもの、さらにはその基準を外から脅かすものにもなるだろう。あるいは、その基準を補佐するものとして存在を認められることもあるし、また、

基準の外にあるがゆえに基準を超越したものとして崇拜の対象となることもあろう。具体例をいくつか上げてみよう。

人間が勝利した17世紀に続く18世紀は、イギリスの詩人ポーブが「人間が研究するのにふさわしいのは人間だ」と宣言したように、人間の本質について議論が百出した時代であったが、実はこの時期、女性の人体骨格図が初めて作られるという興味深い現象が見られる。³¹⁾確かにそれ以前にも身体的な性差は問題とされていたが、例えば16世紀の解剖学の先駆者の一人ヴェサリウスは、性差は体格や生殖器官に限られ、骨格は男女共通であると見做していた。ところが、18世紀になると「我々には女性の骨格図が欠けている」との認識の元に、次々に女性の人体骨格図が登場するようになり、性差は生殖器官や表面的な体格だけでなく人体すべてを貫くものと見做されるようになってきた。しかも、その女性の骨格図は頭蓋骨の小ささが誇張されていたり、また子供の骨格との類似点が強調されていたり、性差が極めて位階的に認識されていたことも示唆している。とするならば、この女性の骨格図の登場とは、一旦人間から排除されていた女性を、人間の基準に足りないものとして規定し直す作業であったと言えないだろうか。実際、欠けていたのは性差そのものではなく女性だったのであり（男性の骨格図にはそれ以前の骨格図がほぼそのまま継承された！）、女性は未発達な人間として新たに付け足されたのである。

また、この18世紀前後の時代とは、社会的には近代家族の形成が始まった時期でもあり、それに伴って女性の存在が再認識され、性の補完性という新しい考え方も登場したが、そこでも女性 は基本的に排除されたものであることに変わりなかった。

これまで多くの研究者が指摘するように、近代家族の特徴の一つは、それが公的な領域から明確に分断された私的領域として形成されるようになった点にある。³²⁾それ以前の社会においても家族は当然存在していたが、そこでは生産活動や社交も展開されており、現在のように私的な営為のみが行われる場ではなかった。いやむしろ、人々の生活が公私の二つの領域に分断されるようになったのは近代以降の現象であると言うべきであろう。そして、こうして私的領域が特化した近代家族とは、『子供の誕生』を著したアリエス等が指摘するように、子供を中心とする夫婦の絆に象徴される生殖と性の場として構築されていくが、それは同時に女性の間であると見做されるようになった。

例えばルソーは『エミール』の中で、女性とは本質的に受動的な性格をもっているが、その受動性、即ち、他人に気に入られ他人を喜ばす才能こそ、女性が家庭で育児・家事に専念するに適している証であるという。そしてさらには、女性はこの才能を積極的に用いることによって「服従しながらも男性を支配する」³³⁾ことができるのだから、両性は一方的な支配従属の関係ではなく、互いに補完しあう相互依存の関係にあると論じた。実際、この論理は、当時の社会変化と相まって西欧全体に大きな影響力をもつようになり、ヴィクトリア朝のイギリスでは、家庭に専念する女性像は「家庭の天使」として積極的に評価されるようになった。言わば、主婦としての女性像の確立である。

確かにこの女性観は単純な女性蔑視ではなく、ある意味で女性の存在意義を認めたものである

と言えるかもしれない。しかしながら、「男性の気に入りに、役に立ち、男性から愛され、尊敬され、男性が幼いときには育て、大きくなれば世話をやき、助言を与え、なぐさめ、生活を楽しく快いものにしてやる」²⁴⁾女性とは、たとえ男性に対する影響力がいかに認められようとも、男性および公的領域の補佐役でしかないことは明らかだろう。実際ルソーも「男性は、良いことをする場合、自分だけの考えにだけ依存して、公衆の判断を無視することができる。けれども女にとっては……他人が自分をどう考えるかということも、実際に自分がどういう者であるかということに劣らず大事なことなのだ」³⁵⁾と述べ、男性のみに主体性を限り、その主体的な男性に評価を依存するものとして女性を描き出している。即ち、性の補完性とは両性を対等と見做す論理ではなく、あくまでも中心は男性であり、その中心を補佐するものとして女性を付け加えたに過ぎないのである。それゆえ、この時期に賞揚されるようになった母性愛、夫婦愛、およびロマンティック・ラブ等も決して女性の社会的な地位を高めるものではなく、すでに多くの研究者が指摘しているように、むしろこうした補完性の論理の背景にある男女の非対称性を巧妙に隠しながら、女性自身にその非対称的な役割を内面化させる仕掛けであったと言わざるを得ない。

また、そもそも近代家族に結晶化された性や生殖という概念こそが、フーコー等が指摘するように、この時期、公的な領域から排除されたものであったことを考えるならば、以上の補完的な女性という論理は、そのまま先述の「宿命の女」にもつながるということも付け加えておこう。確かに「家庭の天使」と「宿命の女」とは、一見、正反対の女性像であるかに見えるが、それを性という視点から見直すと、実はともに本質的な共通点を抱えていることが浮かび上がってくるのである。

「宿命の女」の本質が社会＝男性を滅ぼす性的な力にあったことはすでに述べたが、それゆえ「宿命の女」とは、性の脅威という考え方が女性という形で具現化されたものであると言い替えることもできる。一方、「家庭の天使」という女性像においては、性は母性という生殖のみに限定され、女性に性欲は無いとされていた。³⁶⁾特に19世紀には、女性あらゆる性的な事柄から隔離されて育てられることが理想であり、その性的な無知ゆえに結婚初夜は実質上夫による強姦の様相を呈していた場合も少なくなかったという。いずれにせよ「家庭の天使」に具現化されている性とは、社会＝男性を脅かすこと無く、ただ奉仕するものであった。とするならば、この両者は、それぞれ表面化した形は異なるとはいえ、ともに公的領域から閉め出された性をいかに解釈するかという過程の産物であると言えるだろう。両者の違いは、それを役に立つものとして飼い慣らして社会に再び取り込むか、あるいは、その異端性をそのまま強調・誇張するかという性に対する解釈の違いでしかないものであり、しかも、その解釈がこのように女性を通して表現されたということは、性それ自体と同様に女性もまた社会から排除されたものと見做されていることを示唆しているのである。

実際、近代は、以上のように社会から全面的に主体性を奪われた女性が社会にとっての問題を反映させ、説明する道具として重宝されるようになったため、決して女性が無視されていた時代ではなく、むしろ極めて多くの関心が女性に集まり、非常に多くの女性像が輩出した時代であっ

た。例えば、すでに述べた家族や性のほかにも、この時期専ら女性を通して語られるようになったものには、美や身体の問題があった。このことは、当時の女性の服装が、厳格な性道德にも係わらずコルセットなどで肉体を強調しながら様々に意趣を凝らして作られるようになった一方で、男性の服装はモノトーン化するとともに身体の線を目立たせない形へと変わっていったことにも表れている。美や身体は男性から排除され、主に女性の問題とされるようになったのである。それゆえ社会は失ったものに対する希求も募らせ、逆に女性の美や徳を礼賛する論調も盛んになり、『愛』『女性』などを著したミシュレは「女性は愛以外のなにものでもなく」「女性は宗教である」³⁷⁾とも述べているが、その傾向は、一種の両性具有願望としても表出している。特にロマン主義の時代に生まれた天才像には、ボードレール等がメランコリーやヒステリー気質の重要性を指摘しているように、しばしば女性性が必要不可欠なものとされていた。

しかし、この場合にも求められ礼賛されていたのは女性という概念であって、女性そのものではなかった。当時の典型的な天才論者の一人ヴァイニンガーも「天才的な男は、その他あらゆるものに似て、自分自身の中に女性的なものをもっている。だが、女自身は宇宙の一部に過ぎず、一部は決して全体ではありえない。女が天才を含みえた試しはない」³⁸⁾と明言している。社会は、自らに無いもの、自らを越えるもの、自らの問題点を全て女性という形で解釈し形象化しようとしてきた。それゆえ女性は確かに多様な形で出現したが、すでに繰り返し指摘してきたように、そのいずれも社会の要請に合わせて意味付けられたものでしかなく、その主体性は常に不問にされていたのである。そして、このように女性が社会の問題を反映する有効な道具となった背景には、17世紀前後に起こった女性の人間からの排除という構図が歴然と存在し続けているのではないだろうか。

Ⅲ. 女性概念の可能性

以上、西欧文化における女性概念の変遷を素描しながら、いかに近代社会が自らを作り上げ、支え、時には守り、時にはそれを越えるために、女性という概念を必要としてきたかを明らかにしてきた。先の引用の中でボーヴォワールが述べている女性の「他者」性が、まさにこのことを示唆していることは言うまでもない。

そしてこの女性という概念は、概念としてのみ存在していたのではなく、当然、実際の女性自身にも影響を与え、女性は様々な社会的な仕掛けの中でこの概念を内面化していくことになってしまった。それゆえ、主体であるにもかかわらず「他者」でなければならないという問題が、以降常に女性につきまとうこととなる。確かにこの分裂は、経済的な依存関係を正当化した性の補完性の論理などによって巧妙に意識化を阻まれてきたが、当時すでに自らの欲求や名誉欲あるいは生活の糧のために、男性と同様に公的な領域で活動しようとしていた女性たちの前には、社会からの徹底した攻撃という形で姿を現した。例えば、19世紀に急増した女性の工場労働者は「女性労働者！神をも恐れぬ汚れた言葉」³⁹⁾とののしられ、彼女たちの私生活は乱れていると決め付

けられた。また女性小説家は筆名を男性に変え、また、主婦としての仕事が自分にとっては第一の責務であり、執筆は趣味でしかないと常に公言していなければならなかった。⁴⁰⁾しかし、そうまでして彼女たちが得た最大の好意的な評価は、せいぜい「男性並み」であるということだった。

こうして自身の人格が「他者」であることに拘束されていることに気付いた女性たちは、1章でも素描したように必然的にフェミニズム的な活動へと踏み出していった。ゆえにその活動は、女性の社会進出、性の解放、女らしさの否定などの具体的な社会運動から、女性を「他者」に囲い込んでしまっている現状社会の分析と批判、あるいは、過去についても「他者」として無視されてきた女性たちの生活や業績の発掘等、様々な分野に亘っていたが、いずれも女性を「他者」から解放することを第一の目的としていた。

しかしながら、今のところ、その成果は不十分であることも既に述べたとおりである。勿論、現在は過渡期であり、また遅々としているとはいえ確実に女性の地位は上がっているのだから、結論を出すのは早急すぎると言われるかもしれない。だが、1章でも述べたように社会の側の変化の無さには、それ以上の問題が含まれている。即ち、女性が「他者」であるということは、社会が「他者」を必要としているかぎり、本質的には解消できない問題なのである。たとえ女性が社会に参入することができたとしても、社会は巧妙にそれを許可し、新たな女性、あるいは女性に代わるものを作り直す作業に入るだけだろう。例えば、近年のフェミニズムでも、女性の問題とはみな一律ではなく年齢・人種・階層によって異なることが注目されているが、これは、ある意味で「他者」性の程度差が厳密に議論されるようになっただけである。つまりそれは、「他者」からより脱し易い女性とより難しい女性という差異化であって、いずれにせよ女性が社会によって必要とされている「他者」であるという構図は変わらないばかりか、むしろ、この構図自体の持つ本質的な問題を曖昧にしてしまう危険性さえ内包していると考えられるのである。

社会は「他者」を必要としているのだから、簡単に「他者」としての女性を手放すことはない、それゆえ「他者」を必要とする構図自体の変革無しには、今後の女性問題に根本的な展開は望めない——今やこうした認識こそがフェミニズムに必要とされている。その第一歩は、女性の「他者」性の構図を様々な分野で具体的に考察していく作業であり、本稿でもそれらの業績を用いて議論を展開してきた。そして、こうして明らかになった女性の「他者」性の具体的な内容は、同時に、それらを排除してきた社会の特徴を浮かび上がらせる。例えば、既述のように女性概念が性・身体・感情などと密接な係わりがあるということは、社会がそれらを排除・抑圧していることを意味しているからである。ゆえに次の段階として、逆に「他者」であるそれらの論理を積極的に評価して、社会の側の論理の絶対性を相対化するならば、後者の閉塞性を突き破る糸口を見いだすこともできるのではないか——実際、こうした発想に立って、社会の批判とその変革につながる新たなパラダイムの提示を模索しようとする試みも始まった。そしてこの時フェミニズムは、単なる女性についての学問を越えた社会批判の学としての本質を顕わにしていくだろう。

例えば、近年の近代思想批判の中で関心がもたれているテーマの中には、性、愛、身体などがあるが、それらはこれまで女性の特性とされてきたものであった。その中でも性の問題は、レヴィ

ナス、フーコー、ドゥルーズ、ガタリ等によって最も刺激的な題材の一つとなっている。確かにこの作業に携わっている者すべてがフェミニストを自認しているわけではないが、少なくとも彼等は性の「他者」性を看破し、その考察が脱近代の模索につながることを示唆してきた。特に性（エロス）の本質を「女性的なるもの」と積極的に結び付けたレヴィナスは、エロスとは、自己同一的であるがゆえに孤独な近代的な主体、したがって力・支配・所有・認識・把握を求めざるをえない主体のあり方とは根本的に異なると述べている。⁴¹⁾

そしてさらに、この姿勢をより積極的な形で打ち出したのが、近年のフランスを代表するフェミニストのクリステヴァとイリガライである。彼女たちは、多少のニュアンスの違いこそあれ、これまで常に男性を基準として考えられてきた女性の性のあり方をそれ自体として再考しようとした。それによれば、女性の性とは「自己により、自己の中で、自己と触れ合」⁴²⁾っているため「単なる一つに決してならず」⁴³⁾「言葉に定着したり固着したりしない」⁴⁴⁾本質をもち、したがって「(社会の父性的な) コードを壊し、言語を破壊し、社会契約から抑圧された身体・感動・言い得ぬものなどにより近い特有の言説」⁴⁵⁾を生み出す力を内在しているという。この議論は、しばしば伝統的な「女らしさ」への回帰として誤解される危険性もあると言われるが、そこでは、これまでの理性＝ロゴス中心主義的なパラダイムによって排除されていた女性という概念の特質を戦略的に対比させることによって、そのパラダイム変革の起爆剤にしようとしていることを見逃してはならない。

また、同様の問題をより実践的・具体的に取り組んでいる分野の一つとして精神分析学を上げることでもできるだろう（上述のクリステヴァとイリガライも精神分析学者である）。そもそも20世紀初頭の精神分析学誕生の背景には、当時の西欧社会において性が既述のように「他者」として疎外されていた状況が存在する。しかしながらフロイトは、こうした性の「他者」性の構図に気付いたとは言うものの、その構図の変革へと自らの理論を導いたわけではなかった。実際、彼以降の精神分析理論が依拠する精神構造のモデルとは、成長過程で性的な繋がりを分離・克服・制御していく自立的な自我であり、ここでは性の「他者」性こそが議論の前提となっている。そして、エディプス・コンプレックスの理論に明確に示されているように、そのモデルの基準は男性であり、この理論では女性の精神構造が説明しにくいことはすでに何度も指摘されていた。女性は、せいぜい「ペニス羨望」に捕らわれ、男性に比べて未発達な自我しか持たないと考えられてきたのである。

ところが現在、このように男性を基準として判断されてきた女性の生き方や人間関係の作り方を積極的に評価しようとする動きが、心理学・精神分析学の内部から起こりつつある。⁴⁶⁾例えば、母子関係においても従来のように子供（＝息子）を中心に考えるのではなく、母親に焦点を当てるならば、そこには常に変化するもの（＝子供）と対面しながら自らの対処の仕方を変えていくという精神構造のあり方が浮かび上がってくる。これは、他者から余りに分離した自立を偏重する従来のモデルと異なり、他者との関係性の中で自我の生成を認識していこうとするものである。しかも、こうした精神構造モデルの再考に基づく実践は、単に必要以上に抑圧されてきた女性だ

けではなく、自立を強制されてきた男性の諸問題を解決する際にも有効であるという。それゆえ、これもまた、女性という概念を戦略的に用いて新たな人間関係や自我のあり方を模索しようとする試みの一つであると言えるだろう。

以上の思想や精神分析学におけるフェミニストたちの動きは、一例に過ぎない。この他にも文学、美術、歴史、科学等の様々な分野でもフェミニストは同様の姿勢のもとに活発な問題提起を投げ掛けつつある。⁴⁷⁾ これまで女性という形で排除されてきた業績、あるいは、男性を基準としてきたがゆえにその意義が十分に認識されてこなかった業績を発掘して、その本質をそれそのものとして捉え直すことによって、ただ女性を付け加えるだけではなく、むしろ、それぞれの認識枠そのものを相対化し変革していくために議論を仕掛けているのである。では、このフェミニズムからの仕掛けに対して、社会はどう反応していくだろうか。それは今後の経緯に注目してみたい。

おわりに

以上筆者は、今後のフェミニズムに新たな展開をもたらすきっかけの一つとして、女性概念の再考という問題に取り組んできた。即ち、簡単にまとめるならば、西欧社会におけるそれは、特に近代以降、社会から排除された「他者」として構築されてきたのだが、その「他者」性ゆえ、実は現在社会のパラダイムを転換させる可能性も含んでいることを指摘してきたのである。勿論、本稿の議論は余りに大まかで具体性に欠ける嫌いがあることは承知している。しかしながらその主旨は、今後のフェミニズムをより建設的な方向に進めるための第一歩を提示することであった。ゆえに以降、これを一つの叩き台として批判検討を重ねていきたいと考えている。

ところで、ここでもう一つ付け加えておかなければならないことは、以上の議論の普遍性についてである。本稿で指摘した女性概念のもつ社会批判力とは、それが歴史文化的な所産であることに依拠する。したがって、確かに女性概念の本質が「他者」性にあるという認識は一見あらゆる文化社会の女性問題に有効であるかに見えるが、その「他者」性の具体的な内容、さらには「他者」という観念それ自体すら、当然歴史文化的に異なるに違いない。とするならば、それを社会批判とどう結び付けていくかというフェミニズムの戦略も普遍的・画一的ではありえないこととなる。実際、近代西欧の女性概念が以上のように社会批判の有効な契機として考えられるのは、この女性を規定している「他者」という観念が、すでに指摘したように近代西欧で強化された「同一者」の観念と表裏一体のものとして構築されてきたという歴史的な経緯があるからである。しかし、他の文化社会ではどうだろうか。⁴⁸⁾ そのうち、我々の日本社会の例を最後に取り上げてみよう。

日本文化における女性概念の特殊性については、既にしばしば指摘されてきている。ここでその議論を十全に展開するには紙面も準備も不足しているが、大越愛子氏の非常に興味深い論考⁴⁹⁾を元の一つだけ指摘しておく、それは性の文化的な意義付けに係わる問題である。近代西欧に

において性とは近代的な主体が成立する際に制御すべき極めて重要な「他者」であり、それゆえ当然、女性概念の構築にとっても本質的な要素の一つであった。ところが日本文化では、性はこうした存在論的な意義を持つものとして捉えられていない。それは個人が一人の責任主体となる契機とはならず、むしろ何ら文化的な意義付けを与えられぬままに置かれていると言ってもよい。それゆえ、確かに日本の女性概念にも性という問題が投影されてはいるが、そのあり方は非常に異なる。ところが大越氏によれば、日本のフェミニズムはこれまでこの問題を直視してこなかったために、いずれも社会批判の力を発揮することができずに、いつの間にか日本的共同体原理の中に吸収されてしまうという歴史を繰り返し、現在もその危険性を抱えたままであるという。

こうした日本のフェミニズムの閉塞状況を打ち破るためには、言うまでもなく早急に日本文化における女性という概念を歴史的に再考することが必要とされる。大越氏も、特に日本の女性に対する不浄視や母性偏重などに注目しながら、それをキリスト教文化に対する仏教文化の特徴として論じている。筆者自身はこの議論に多少の異論はあるが、今後の議論の出発点としては傾聴に値するだろう。すでに何度も、日本の女性問題は表面的な現象はともかく本質的には欧米のそれと異なるがゆえに、フェミニズムの方向性・戦略も欧米のものがそのまま通用しないとわれ続けてきた。とするならば、今こそその差異を具体的に明らかにしていかなければ、日本のフェミニズムは永遠にその本質であるはずの社会批判の学にはなりえないのではないか——本稿の主張する女性概念の方法論的な意義とは、特に日本の今後のフェミニズムの動向の中で真剣に考察すべき問題かもしれない。

注

- 1) 但し、この語を初めて使ったのはフーリエではなく、後(1880年代)のフランスの女性参政権運動の創始者ユベルティーヌ・オークレールであるとする研究もある。有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房1988年、iiページ参照。
- 2) 1793年パリ自治市会に赴いた女性たちに対して市会最高幹部のショームットが行った演説の一部。ジャン・ラボー『フェミニズムの歴史』新評論1987年、85ページ。
- 3) ラボー前掲書、80ページ。
- 4) ヴィクトリア時代の女性作家ハリエット・マーティノーによる批判。エレン・モアズ『女性と文学』研究社出版1978年、30ページ。
- 5) しかも最初の出版は私家版としてであって、現在でも完全な作品としては手に入らないという。エレイン・ショーウォーター『心を病む女たち—狂気と英国文化—』朝日出版社1990年、79～83ページ。
- 6) ショーウォーター前掲書、207～8ページ。ショーウォーターの本書は、19世紀後半以降の神経症・精神病の診断や治療法がいかに性と権力の不均衡の中で行われ、その結果、いかに女性が「病めるもの」と決め付けられ犠牲となってきたかを明らかにしている。
- 7) ショーウォーター前掲書、184ページ。
- 8) エヴリン・フォックス・ケラー『ジェンダーと科学』工作舎1993年、11ページ。
- 9) シモーン・ド・ボーヴォワール『第二の性』新潮文庫 第4巻、7ページ(原著1949年)。
- 10) ヴァージニア・ウルフ『自分だけの部屋』みすず書房、105ページ(原著1929年)。
- 11) ボーヴォワール前掲書 第5巻、78～9ページ。

- 12) ボーヴォワール前掲書 第4巻, 12ページ。
- 13) この観念は、ディコンストラクションという西洋思想の解体作業を提唱したデリダ等によってロゴス中心主義という言葉で捉えられているものに匹敵する。但し、このロゴス中心主義は、近代に強化されたとはいえ、その根源はそれ以前に遡る。しかし、これは西欧文化の多層性という極めて複雑かつ未だ未解決の問題を惹起するので、本稿ではとりあえず近代以降の問題として論ずることとする。
- 14) マリオ・プラーツ『肉体と死と悪魔』国書刊行会1986年。
- 15) 山川鴻三『サロメー永遠の妖女』新潮社1989年, 27~45ページ。
- 16) ティツィアーノ《サロメ》1515年頃ローマ・ドーリア美術館蔵。山川鴻三前掲書, 47ページ。実際、この絵の背景にはキューピットが描かれており、ヨハネの首は恋人の首であることを暗示しているという解釈もある。
- 17) 例えば、クエンティン・マセイス《ヘロデの宴》1508~11年や、チャーザレ・ダ・セスト《サロメ》16世紀初頭。
- 18) 例えば、ティツィアーノ《ユディット》1565~70年頃と、同じくティツィアーノ《サロメ》1560~70年頃の比較など、高橋裕子氏1992年3月18日国立民族学博物館共同研究会での発表より。
- 19) たとえば、スウィンバーンは淫蕩な東洋女性たちを書き綴った『女王ベルサベの仮面劇』の最後にドロレスを登場させ、またモナリザを再評価したペイターは『ルネサンス』の中で、その美を不吉なまでの神秘として描いている。プラーツ前掲書, 312~3, 334~5ページ。富士川義之『ある唯美主義者の肖像—ウォルター・ペイターの世界—』青土社1992年, 128~42ページ。
- 20) 荒井献『新約聖書の女性観』岩波書店1988年、エリザベート・ゴスマン『フェミニズムとキリスト教』勁草書房1984年など参照。
- 21) ロンダ・シービンガー『科学史から消された女性たち—アカデミー下の知と創造性—』工作舎1992年, 160~1ページ。
- 22) 科学史家キャロリン・マーチャントは、この時代のパラダイムの転換を「自然の死」と呼んで告発している。キャロリン・マーチャント『自然の死—科学革命と女・エコロジー』工作舎1985年参照。
- 23) デカルトを始めライブニッツ等、当時の多くの科学者は機械的な宇宙のイメージを表すために時計の比喩を好んで用いていた。
- 24) マーチャント前掲書, 316~7ページより引用。このほかベーコンの自然観については、ケラー前掲書, 第2章参照。
- 25) ケラー前掲書, 90ページより引用。
- 26) キャベンディッシュは『哲学書簡』『実験科学上の観察報告』『自然哲学の基礎』などの極めて質の高い業績を発表していたが、アカデミーには表敬訪問が許可されただけで、その出入りさえ認可されなかった。シービンガー前掲書, 40, 67~83ページ。
- 27) 1667年にスプラットによって著された『ロンドン王立協会の歴史』の中の一文。ケラー前掲書, 90ページより引用。スプラットの論旨の特徴については、ブライアン・イーズリー『魔女狩り対新哲学』平凡社1986年, 314~24ページ参照。
- 28) 例えば、先述のグランヴィルは1666年に『魔女と幽霊が存在することを弁護するための哲学的努力』を著し、魔女狩り論争に大きな影響力を与えた。
- 29) イーズリー前掲書。
- 30) イーズリー前掲書, 190~1ページ, ラボー前掲書, 32~7ページ。
- 31) Schienger, Londa 1987 "Skeletons in the Closet: The First Illustrations of the Female Skeleton in 18th-Century Anatomy" in C. Gallagher & T. Laqueur *The Making of the Modern Body*, University of California Press.
- 32) 近代家族の生成については、Shorter, Edward 1975 *The Making of the Modern Family*, Basic Books, 落合

恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房1989年などを参照。

- 33) ジャン＝ジャック・ルソー『エミール』岩波文庫 下巻, 34ページ (原著1762年)。
- 34) ルソー前掲書 下巻, 21ページ。
- 35) ルソー前掲書 下巻, 20～1 ページ。
- 36) 特にこの考え方がヴィクトリア朝のイギリスにおいて流布していたことは、スティーヴン・カーン『肉体の文化史』法政大学出版局1989年に詳しいが、フランスでも同様であったことは、例えば、同時代のモーパッサンの小説『女の一生』の女主人公ジャヌの初夜の出来事などを思い出していただきたい。
- 37) ジュール・ミシュレ『女』藤原書店, 95ページ (原著1859年)。
- 38) クリステーン・バタースビー『性別と天才』現代書館1992年, 229ページより引用。
- 39) 1860年フランスの政治評論家ジュール・シモンの『女性労働者』の一文。但し、この句はミシュレの『愛』(前掲書21ページ) よりシモンが転用。この問題については、ジョーン・スコットの『ジェンダーと歴史学』平凡社1992年第7章参照。
- 40) Showalter, Elaine 1977 *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Bronte to Lessing*, Princeton University Press, ch. 1～3 参照。
- 41) エマニュエル・レヴィナス『時間と他者』法政大学出版局 (原著1948年)。
- 42) リュース・イリガライ『ひとつではない女の性』勁草書房1987年, 24ページ。
- 43) イリガライ前掲書, 34ページ。
- 44) イリガライ前掲書, 31ページ。
- 45) ジュリア・クリステヴァ『女の時間』勁草書房1991年, 133ページ。
- 46) 具体的には、ジーン・ベーカー・ミラー『イエス, パットーフェミニズム心理学を目指して』新宿書房1989年 (原著1976年) など。また、ケラー前掲書, 5～7章参照。
- 47) 例えば, Parker, Rozsika & Griselda Pollock 1981 *Old Mistresses: Women, Art and Ideology*, Pandora Press., Gilbert, Sandra M. & Susan Gubar 1980 *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the 19th-Century Literary Imagination*, Yale University Press.などを上げておく。
- 48) 拙稿「ジェンダーからセクシャリティーへ—イタリアの性に関する考察の試み—」『民族学研究』57巻では、イタリアの性や女性概念の特殊性に着目した。
- 49) 大越愛子「フェミニズムは愛と性を語るか」山下明子編『日本的セクシャリティーフェミニズムからの性風土批判』法蔵館1991年。